

# 林芙美子的中國體驗：以遊記為探討中心

黃翠娥

輔仁大學日本語文學系兼任教授

## 摘要

芙美子於 1930 年應邀赴臺，之後多次前往中國大陸，1937 年隨《每日新聞》採訪南京，1938 年又隨「筆部隊」從軍漢口，並發表《我的昆蟲記》《戰線》《北岸部隊》等作品。這些作品多讚揚日本兵、冷淡描繪中國人，帶有強烈的國家主義色彩，特別是對南京大屠殺完全未及一筆，引起持續爭議。本研究參考了先行研究的一些視點，例如，軍部檢閱、作家功名心、愛國主義與大東亞共榮圈思想有關，也指出與其丈夫受到徵召及「敗戰國」恐懼、幼年貧困經驗相關。同時，也探究出芙美子的作品中亦流露對平和生活的嚮往與戰場上的無常感，並非單純的戰爭讚美。此外，她目睹西方列強對中國人的蔑視，反而強化了對共榮圈理念的信念。戰後，她在《女の日記》〈晚菊〉〈浮雲〉等作品中批判戰爭，展現反思。因此，芙美子既是戰爭協力者，又具有矛盾而複雜的多面性。

關鍵詞：林芙美子 中國觀 《戰線》 《北岸部隊》 筆部隊

受理日期：2025 年 08 月 29 日

通過日期：2025 年 11 月 07 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202512\_(45).0008

# **Fumiko Hayashi's Experience in China: Focus on Travel Writings**

Huang, Tsui O

Part-time Professor, Department of Japanese Language and Literature,  
Fu Jen Catholic University

## **Abstract**

Hayashi visited Taiwan in 1930 and later made several trips to mainland China. In 1937, she reported from Nanjing as a correspondent for the Mainichi Newspaper, and in 1938 she joined the “Pen Corps” during the Hankou campaign, publishing works such as *My Insect Diary*, *The Battlefield*, and *The Northern Bank Unit*. These works often praised Japanese soldiers while depicting the Chinese coldly, reflecting strong nationalist sentiment. The fact that she made no mention of the Nanjing Massacre has remained highly controversial. Previous studies have attributed this to military censorship, her personal ambition, patriotism, and the ideology of the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere, as well as to her husband's conscription, fear of national defeat, and her own childhood poverty. At the same time, her writings reveal a longing for peaceful life and a sense of impermanence, showing complexity beyond mere wartime glorification. Moreover, witnessing Western colonial contempt for Chinese people reinforced her belief in the Co-Prosperity Sphere. After the war, she expressed self-reflection and criticism of war in works such as *A Woman's Diary*, *Late Chrysanthemum*, and *Floating Clouds*. Thus, Fumiko Hayashi was not only a wartime collaborator but also a multifaceted figure marked by contradictions and complexity.

Keywords: Fumiko Hayashi, View of China, *The Battlefield*, *The Northern Bank Unit*, Pen Corp

# 林芙美子の中国体験

## —旅行記を中心に—

黄翠娥

輔仁大學日本語文學系兼任教授

### 要旨

本稿は林芙美子の中国体験、とりわけ従軍記や旅行記に表れた中国観および戦争協力者としての姿を考察するものである。芙美子は1930年に台湾を訪れ、その後幾度も中国大陆に赴いた。1937年には『毎日新聞』の特派員として南京取材し、1938年には「ペン部隊」として漢口攻略戦に従軍、『私の昆虫記』『戦線』『北岸部隊』などを発表した。これらの作品は日本兵を称賛し、中国人を冷淡に描き、国家主義的色彩が強い。とりわけ南京事件に一切言及しなかった点は、今なお論争を呼んでいる。先行研究は、軍部の検閲や作家の功名心、愛国主義や大東亜共栄圏思想との関係を指摘し、また夫の応召や「敗戦国」となる恐怖、幼少期の貧困体験との関連も論じている。同時に、作品には平和への憧れや戦場での無常観も漂い、単純な戦争賛美にはとどまらない。また、西洋列強による中国人蔑視を目の当たりにした体験は、かえって共栄圏理念への信念を強めた。戦後には『女の日記』『晩菊』『浮雲』において戦争批判を展開し、反省を示した。したがって芙美子は「戦争協力者」であると同時に、矛盾と複雑さを抱えた多面的な存在であったといえる。

キーワード：林芙美子、中国観、『戦線』『北岸部隊』、ペン部隊

## 林芙美子の中国体験—旅行記を中心に—

### 1. 始めに

林芙美子（1903—1951）の海外経験は以下のとおりである。昭和5年（1930）に台湾総督府の招待により、1月5日から15日まで台湾に滞在し、生田花世、望月百合子、北村兼子、堀江かど江、山田やす子らと共に台湾を巡回して講演旅行を行った。芙美子は「婦人毎日新聞」主催の「婦人文化講演会」に参加し、台湾各地で、女性啓蒙を目的とする講演や座談会を実施した。その後、『改造』3月号に「台湾風景」などの紀行文を発表している。<sup>1</sup>

同年7月には『放浪記』を改造社より刊行、ベストセラーとなった。その印税をもとに8月中旬から、9月25日にかけて中国大陸を旅行した。さらに昭和12年（1937）12月27日には長崎から船に乗り、南京に向けて出発した。当時東京日日新聞・大阪毎日新聞（後の毎日新聞）の特派委員として、同月13日に陥落したばかりの南京取材するためであった。南京市内に三泊、前後に野営を一泊ずつ行い、計五泊六日の南京取材旅行だった。翌年7月には『私の昆虫記』<sup>2</sup>を刊行し、さらに同年9月には、内閣情報部編成のペン部隊の一員として、漢口攻略戦に従軍し、漢口への一番乗りを果たした。この従軍体験は同年12月25日刊行の『戦線』<sup>3</sup>及び翌年昭和14年（1939）1月1日刊行の『北岸部隊』<sup>4</sup>に結実した。<sup>5</sup>

<sup>1</sup> 林芙美子『愉快なる地図：台湾・樺太・パリへ』、東京都：中央公論新社、2022

<sup>2</sup> 改造社、1938.7（南京行、静安寺路追憶、私の従軍日記、露營の夜、曾遊の南京、北支那の憶ひ出）などの中国関係の文章が掲載される。

<sup>3</sup> 朝日新聞社によって刊行され、2006年に中公文庫版が出る。一信から二十三信の書簡文で構成されており、写真のほかに、著者自身の手によるスケッチもある。

<sup>4</sup> 婦人公論に掲載した日記体で、六編からなる。「九月十九日 小雨」から「十月二十八日 雨」まで綴られている。ただし引用は1939年に中央公論社に刊行されたものによる。上海へ到着してから各地を視察し、さらに最前線の部隊と合流し漢口に入城するまでの経緯が日記形式で書かれている。『北岸部隊』の中の「北岸」とは長江の北岸のことである。

<sup>5</sup> 川本三郎「林芙美子 略年譜」（『林芙美子の昭和』、新書館、2003.12、pp.399-407）を参照。ただ、二つの従軍記はほとんど同時に書かれたが、出版には一週間の前後がある。

昭和 15 年 (1940)1 月 5 日から 2 月 3 日にかけて、芙美子は実業之日本社との特約により北満州を旅行した。その成果として、同年 4 月号『新女苑』に旅行記「凍れる大地」<sup>6</sup>を發表している。戦火の拡大に伴い、作家の戦地派遣も大規模化する中で、芙美子は昭和 17 年 (1942)から翌年 (1943)にかけて南方に赴き、ベトナムやインドネシアに滞在した。

台湾観については筆者がすでに触れたことがある<sup>7</sup>が、芙美子の研究をさらに深く探究するならば、彼女の中国体験についての研究が大きな手掛かりとなるだろう。中国旅行記の量は多く、また頻繁に論議の対象となっているからである。したがって、本研究は特に芙美子の中国旅行記を分析することによって、彼女の中国観および戦争協力者としての本質を明らかにすることを目的とする。

## 2. 物議を醸された点とその先行研究

前述のように、芙美子の旅はそれぞれ著作として残されている。それらの著作は大きな反響を呼び、当時批判の対象となったものもあれば、その後の長い年月において、賞賛や擁護を受けたもの、あるいは再び批判されたものもあり、今日に至るまで論争を引き起こし続けている。特に、昭和 12 年 (1937) の南京視察旅行に際し、同時期に発生した南京大虐殺事件について一切言及しなかったことは、大きな議論を呼び起こした。即ち、芙美子はまさに南京の渦中にいたはずにもかかわらず、帰国後半年で刊行された『私の昆虫記』に収められた南京従軍記には、虐殺行為への言及はまったく見られない。芙美子は「曾遊の南京」において、「今日、南京陥落をきゝ、私は自分達の民族がこゝに流してくれた尊い血潮に合掌して感謝しなければならないと思ひます。」(P.62)と記しているが、大虐殺に関する記述は欠落している。これは芙美子が意図的に無視したのか、

---

<sup>6</sup> 満洲移民、大陸の花嫁、青少年義勇隊との交流を描く作品である。

<sup>7</sup> 「北村兼子と林芙美子、台湾とのかかわり」『日本語日本文学』第五十二輯 2023.7、pp.70-96

それとも、軍部の検閲や規制の影響によるものなのか、議論が分かれる。

南京大虐殺事件を扱わなかったことに関する先行研究は数多く存在する。その中から代表的な見解を整理すると以下のとおりである。まず陳亜雪氏は、芙美子の従軍記には客観性が欠けており、当時の芙美子は時局に妥協したと言わざるを得ないと指摘し、石川達三のように戦争の実態を率直に描き、勝利に酔う銃後の人々に反省を促す勇気を、芙美子は持ち得なかったと論じている。<sup>8</sup>これに対し、家森善子氏は、南京視察旅行の二か月後に執筆された小説「黄鶴」に登場する主人公・重子の重苦しい心境描写を根拠に、芙美子には戦争に対する疑念や否定的な感情が芽生えていたとし、反戦的姿勢を持っていたと結論づけている。<sup>9</sup>一方、宮田俊行氏は異なる見解を示す。芙美子が「南京行」や「静安寺路追憶」において中国人を称賛する表現を用いている点に注目し、当時の南京は比較的平穏であった可能性を示唆する。さらに、翌年従軍した漢口攻略戦を題材とした『戦線』には、中国兵の処刑場面や死体が散乱する描写までも記録している。陸軍派遣という制約下でありながら、日本軍に不利となり得る記録まで含まれているのに対し、南京戦は新聞社の派遣であり、むしろ自由度が高かったはずだと指摘する。したがって、「芙美子は虐殺があったのに書かなかったのではない。気づかないふりをしたのでもない。なかったのだ。」と宮田氏は結論づけている。<sup>10</sup>

さらに、昭和 13 年（1938）の漢口攻略戦をめぐる従軍ルポルタージュである『戦線』と『北岸部隊』の二作についても物議を醸した。両作はわずか一週間の間隔で刊行された作品である。『戦線』については、朝日新聞の「文壇人従軍記」に「漢口戦従軍通信」が掲載され、武漢陥落を祝う 10 月 29 日の紙面には、「ぺん部隊の

<sup>8</sup> 陳亜雪「林芙美子の南京視察旅行」『内海文化研究紀要』42号、2014.3、p.18

<sup>9</sup> 家森善子「林芙美子—戦争迎合作家の反戦感情」『国文目白』第四十五巻、日本女子大学国語国文学会、2006.2、p.128-134

<sup>10</sup> 宮田俊行「林芙美子は「南京大虐殺」を見たか」『正論』第560号、産経新聞社、2018、pp.132-133

女丈夫 漢口へ一番乗り、勇士も驚く林芙美子さん」と題した写真入りの記事が掲載され、「林さんの漢口入城は全日本女性の誇りである」と讃える文が添えられた。これは銃後の人々を感情的に動員するための大きな宣伝効果を持ったと言えるだろう。一方、『北岸部隊』は『戦線』と行程は共通しているものの、自己観照的な記述が目立ち、敵へのまなざしも異なる。

芙美子が戦争協力者だと見なされた理由の一つは、作品において中国蔑視と日本兵賛美の記述が多く含まれている点にある。例えば、『戦線』（中央公論社、2014、「十四信」、p.80）において、「支那事変なんて、遠慮深いちっぽけな言葉で、今度の戦いを謙遜しなくてもいいと思いますが、（中略）『戦争』でいいではありませんか。堂々と、実に水ぎわだった堂々さでこの軍隊は戦っているのです。揚子江北岸部隊の強さは、一つには困苦欠乏に黙って耐えている牛のような底力にもよると言えましょう。」と記し、日本兵の戦闘力や忍耐力を称賛している。また、「十一信」（p.68）では、「戦友をうしなつて鬱々としているこの兵隊の気持にも私は沁みるものを感じる」というように、中国兵を惨殺した日本兵の心情に共感を示し、その行為を理解可能なものとして描いている。実際、従軍ルポルタージュの中では、残虐な中国兵の死体描写も存在する。

小さい城門を這入って行くと、汚い廃居の並んだ狭い往来に、るいるいたる中国兵の死体が横たわっていました。或る一軒の家では、壁に凭れたまま棒のようなものを握って息の絶えている支那兵もいました。半洋袴にだぶだぶの上着を着た、まだ十七八の少年兵で、肩や背に黒い血が乾いています。私の神経は実に白々とこれらの死体をみまもっていられます。上巴河の敵前渡河の時に見た、担架に揺られて後方へ運ばれて行く、日本の負傷兵へのあの感傷は、生涯私は忘れることは出来ませんが、この中国兵の死体は、私に何の感傷もさそいません。（『戦線』、「十信」、p.60）

と描かれている。

この二作の先行研究も多様である。遠藤光彦氏は「その生々しい記録は芙美子を銃後運動の有力な一員として押し上げていった」とし、芙美子が漢口北岸への一番乗りを果たした経緯を詳細に記している。<sup>11</sup>多くの研究が共通して指摘するのは、従軍ルポルタージュを批判し、彼女に戦争協力のレッテルを張る点である。例えば、高崎隆治氏は、芙美子が戦場で目撃した残酷な場面を「美」として描こうと努め、心的動揺を示さなかったことを批判する。その結果、数度の中国訪問で中国の自然や人情に共感を抱いていた芙美子が戦争を経て「変貌」と論じている。<sup>12</sup>岩渕剛氏は芙美子の従軍経緯を詳細に分析し、「このようにして、軍部とメディアはなかば共犯者として、戦争を合理化していった。それに作家たちもさまざまな事情はあったにせよ、「協力」する形になってしまった。(中略)プロレタリア文学運動をすすめた作家たちさえそのような状況におとしまれたことを、安易に『仕方がなかった』といてしまうことはできない。私たちは忘れてはいけないのだ。」<sup>13</sup>と批判した。また、高山京子『林芙美子とその時代』では、「林芙美子と戦争」という章を設け、従軍の動機、手段と成果を詳しく紹介している。<sup>14</sup>「外部からの要請と芙美子の功名心の強さが一致したことは、彼女の戦争協力における重要な要因であった」<sup>15</sup>とし、また「女性一人で過酷な戦場に赴き行軍を共にしたことには想像を絶する困難があったはずであるが、他を出し抜いて漢口一番乗りを果たした抜け目なさ、安易な中国人蔑視表現などには、読者や時局を意識した計算が込められている。すなわち『こう書けば読者は感動するだろう』という意図が透けて見える」と論じている。<sup>16</sup>

さらに、無常感・無力感に注目する立場もある。川本三郎氏は、

---

<sup>11</sup> 遠藤光彦『人と作品 15 林芙美子』清水書院、2018.4、pp.79-81

<sup>12</sup> 高崎隆治「林芙美子の変貌」『戦時下文学の周辺』風媒社、1981.2、pp.16-19

<sup>13</sup> 岩渕 剛「林芙美子の戦場」『民主文学 特集＝戦争と文学』、2022.8、P.9

<sup>14</sup> 高山京子「林芙美子と戦争」『林芙美子とその時代』論創社 2010.6 、pp.144-169

<sup>15</sup> 同注 14、p.154

<sup>16</sup> 同注 14、p.164



林芙美子が戦場で感じ取ったのは無常観と無力感であり、その体験がペシミズムを深め、戦後作品における諦念やニヒリズムへとつながったと指摘する。<sup>17</sup>李相福氏も『北岸部隊』において、林芙美子が幼少期の孤独や東京での苦しい生活を戦場体験の虚無感と重ね合わせていると評している。<sup>18</sup>また、菅聡子氏のようにジェンダーの観点から論究する研究もある。<sup>19</sup>

以上のように、先行研究では従来多様な視点が提示されてきたが、本研究は『私の昆虫記』に収められた南京従軍記および漢口攻略戦を題材とする『戦線』『北岸部隊』を中心に、テキストを詳細に分析する。そのうえで、中国旅行記や台湾紀行との比較を通じて、芙美子の中国観の形成過程、そして戦争協力者としてのレッテルの背後にある要素を探究していく。

### 3. 旅行記における主な趣旨

#### 3.1 国家主義者としての発言

当時の多くの日本国民は、日本が東洋の盟主となり、中国を善導していくという大東亜共栄圏の思想を信じていたに違いない。したがって、戦争を正面から肯定する姿勢をとっていたのであり、芙美子もその例外ではなかった。

彼女の従軍記や旅行記には、日本軍の優秀さを称賛する表現が随所に見られる。これは、従軍記者としての立場とも無関係ではない。たとえば「私の従軍日記」では、「皇軍の働きは、これはもう全く神がかりでせうか。一日もたゆみなく前進して行つてゐるのですが、

---

<sup>17</sup> 山田三郎「十四 女ひとり中国の戦場をゆく」『林芙美子の昭和』新書館、平成 15. 12、p.249

<sup>18</sup> 李相福「戦場における芙美子の無常観『北岸部隊』『戦線』を中心に」『浮雲』第 9 号、林芙美子の会、2017.10、pp.2-4。この文章によれば、林芙美子は中国軍と日本軍に対する表現には顕著な差が見られる。さらに、芙美子は日本の実況を全く無視したまま、日本軍の勝利を絶対的に認め、「ペン部隊」要員としての役割に従事して「ペン勇士」と呼ばれる。しかし、その表面てきな様子の奥で、芙美子は内面の無常観とぶつかっていた。

<sup>19</sup> 菅 聡子「林芙美子『戦線』『北岸部隊』を読むー戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー」『表現研究』第 92 号、表現学会、平成 22.10、pp.25-32

(中略)水も樹もない荒蕪の土地で切り展いてずんずん進んでゆく、日本の兵隊の力は、全く吃驚してしまふのです。」と記している。('私の従軍日記'、p29)。また、『私の昆虫記：他三十七篇』<sup>20</sup>の「南京行」では、中山門をくぐった時、警備に立つ二、三人の兵隊を見て、「なんといふこともなく臉の熱くなる気持ちだつた」<sup>21</sup>と兵隊への情熱を吐露している。さらに、南京の空き家ばかりの光景を見て、「わたしはつくづく批判をするよりもまづ、戦ひには勝たなければいけないと思つた。日本がもしもこんなになつたらどんなだらう、考へただけでも身震ひがしてならない。地球から戦争といふものがなくならないかぎり、國々は常に勝つ用意をしておかなければいけないとおもつた。」<sup>22</sup>というように、国家の戦争行為を正当化・神聖化する。元日に兵士たちが「帰国の日を楽しみにしている」と語る姿を見て、芙美子は「私は歩きながら思はず兵隊さんと握手をした。兎に角ここまで戦ひはきてゐるのだから、この戦ひが無駄でなかつたやうに、わたし達は一生懸命にならなければいけないとおもつた。」(同 p.10)と記す。

彼女は中国兵の死体には無感動であつた一方、馬が死ぬだけで涙を流し、日本兵には深い共感を寄せていた。こうした描写からも、日本軍兵士との一体感の中に自らの立場を見出そうとしていたことがうかがえる。特に『戦線』では兵士賛美や戦争賛美が顕著となる。蒲豊彦氏は「賛美ではなく、国民への扇動と呼ぶべきもので、『北岸部隊』にはまったく見られない種類の表現である」と評している。

23

さらに、『戦線』や『北岸部隊』だけでなく、その前に執筆された『私の昆虫記』においても国家主義的観点は随所に表れる。たと

---

<sup>20</sup> 改造社、1938.7 (南京行、静安寺路追憶、私の従軍日記、露營の夜、曾遊の南京、北支那の憶ひ出)などの中国関係の文章が掲載される。南京行から露營の夜までの四つの文章は南京従軍記である。)

<sup>21</sup> 同注 20、「南京行」 p.4

<sup>22</sup> 同注 21、p.5

<sup>23</sup> 蒲豊彦「第九章 林芙美子の戦場」『戦場を発見した作家たちー石川達三から林芙美子へ』、新典社、2020.11、p.282

えば「北支那の憶ひ出」では、「北支のニュースを見てみましたら、日本の兵隊が一人大寫しになつて、美味さうに水瓜を食べてゐるところがありましたが、汗で汚れてゐる顔を見てみましたら、自然に涙がにじんで來ました。早く平和になつて、日本の山谷にも早く兵隊さん達に歸つて來て貰ひたいものです」。(「北支那の憶ひ出」、p. 83)と述べ、日本兵への共感を基調にしている。

また、「曾遊の南京」においても、南京陥落を聞いた英美子は「私はいまさらに皇軍の神力というのを感じています」と書き、「蒋氏はいつこにいくか。全く『月落ちて烏啼いて』の感じである。」(pp.61-62)と記している。

以上の引用文には、英美子が日本軍を「神がかり」と形容したり、「戦ひには勝たなければいけない」「皇軍の神力」という表現を用いたりしており、当時の日本の戦争を肯定的に捉える記述が並んでいる。また、中国兵の死体への無感動や、日本兵・馬への共感が描かれており、視点が日本側・皇軍側に強く寄っていることが明確である。さらに、他者（中国側）よりも自国（日本）の勝利と正当性を強調する叙述が繰り返されている。無論、これが「自発的信念」か「従軍記者としての立場上の発言」か、まだ論議される余地が残ると思われるが、いずれにしても、これらの記述は明らかに当時の国家主義的イデオロギー(大東亜共栄圏思想・皇軍神話)に共鳴する発言を含んでいるといえるだろう。

### 3.2 平和的な日常生活への憧れ

以上のように、英美子の従軍記には国家主義的な兵士賛美が色濃く表れる。しかしその一方で、彼女は作家としての人間的感情を完全に失っていたわけではない。例えば、『北岸部隊』十月二十五日条では、

「鐵條網のそばに馬や中國兵の死體が散亂してゐた。逃げ遅れた土民が流弾にあたつたのだらうけれど、何故早く逃げてゐなかつたのかと、何と云ふこともなく、その弱い哀れな運命が、私にははがゆい感じだつた。搥がれたやうに生々し

い脚が、枕木のやうに馬の死體のそばにごろんと落ちてゐた。  
誰の脚だかもわからない脚、青い木綿の洋袴に黒い足袋をは  
いてゐる。枯木のやうに、一塊の泥のやうに、その脚はごろ  
りとしてゐた。」(p.195)

と記し、死者への哀れみを示している。それから、平和への期待もある。また、彼女は従軍記者でありながら、強く平和を希求していた。「北支那の憶ひ出」で、北京で案内してくれた中國の大學生、新聞記者の親切さが懐かしい。「事變でも濟めば、また出掛けて行つて、この方達と仲良く世間話としたいものだと思ひます。平和になつたら、文化工作が圓満に早く運ばれて、平和な日支關係になるといゝと念じる氣持ちです。」(「北支那の憶ひ出」p. 75)「何にしても閘北一帯や虹口一帯を早く日本人の手で復興さして、手早く賑やかな街にしたいものだと思ひます。「賣買」のない街は死んだも同様なものですから、早く避難民に戻つて貰つて、あの騒々しい支那人の聲々を街にききたいものだと思ひました」(「私の従軍日記」、p. 34)と述べている。後の「著者の言葉」においても、「戦争の最中には、文學なんてのんきなことは云つてゐられないやうな氣持ちですが、それかと云つて、手放しであることは髓まで乾いてゆくやうな氣持ちです。(中略)早く平和になつて、軒ごとに日の丸の旗のあふれるやうな日を迎へたいと思ひます。さうして、むさぼるやうに、詩も音樂も繪も文學も街頭にあふれる日を待つ氣持ちです。」<sup>24</sup>と述べる。

こうした視点は『戦線』『北岸部隊』のような戦意高揚的記述とは異なり、比較的率直で客観的に中国社会を描いた「哈爾濱散歩」(1930)、「北京紀行」(1936)、「白河の旅愁」(1937)などの随筆にも通じている。『私の昆虫記』(1938)にも中国に関する記述が多く見られる。たとえば昭和5年(1930)に訪れた南京について、「支那といふところは、何度行つても複雑で面白いところだと思ひます。南支那、北支那、そのいずれもが大まかでのんびりして

---

<sup>24</sup> 「著者の言葉」『林芙美子全集第19巻』、新潮社 1952.11、p.286

あるのは不思議な性質を持った國柄だとおもひました。」（曾遊の南京 P.59）と述べている。

以上の引用文では、中国兵や民間人の死体を前に「哀れな運命」と感じるなど、戦場の悲惨さに対する感受性が見られる。これは、戦争を単なる正義の行為として描くだけでなく、人間的悲哀を捉えようとする姿勢を示している。即ち、芙美子の従軍記には、日本兵を賛美し戦争を肯定する国家主義的表現が多く見られる。しかし同時に、彼女は作家としての人間的感情を失ってはいなかった。さらに、戦場における商業や生活の再生を望み、戦後の復興への願いも表れている。「早く平和になって文學・音楽・藝術が街頭にあふれる日を待つ」と述べ、文化的平和の理想を強調する。また、『戦線』『北岸部隊』のような戦意高揚的な作品とは異なり、「哈爾濱散歩」「北京紀行」「白河の旅愁」などでは中国社会を客観的に描いている。

### 3.3 色濃く漂う無常感

芙美子は日本の戦況を正視することなく、日本軍の勝利を絶対視する一方、その内面では強い無常感を抱えていた。

「静安寺路追憶」では、「玄関の入口には、乳色の蕾を固く凍らせた野薔薇がさらさらと風に吹かれてゐますし、敗残の家の姿が、その昔の豪華さをしのばせてゐるだけに、私には哀れにも淋しく感じられるのでした。」（P.18）と記し、戦争の光景から、世の無常を感じ取っている。また、同じ作品で、「静安寺路の平和な舗道を歩きながら、私は始めて無常観に似た感情が、少しづつ私を支配しはじめて来たのに、私は温かいものを飲んだあとのやうに眼を細めるのです。誰だつたかはこの戦争を陣痛にたとへてゐましたけれども、ほんたうに長い陣痛だと思ひます。陣痛が長びくほど、妊婦もさらなり、はたの者も息苦しい感じでせう。だけど、兎に角何かを生まないわけにはゆかないのです。」（P.15）と述べ、戦争を陣痛になぞらえて受け止めている。

『北岸部隊』でも、「このまゝ、日本へ歸れなくなるかも知れない。それもいゝだらう。戦場以外にはいまの私に何の熱情もないのが不

思議だ。續きものゝ原稿のことも考へぬではないけれど、こゝまで来ると、もう、そんな戀物語もどうでもよくなつて来る。全く澤山だ。一生懸命書いたところで、それが、いまの自分の心に何の慰めがあるのだらう。貧乏をしてもいい。何も書くまいと思ふ。」(十月十四日条、pp.87-88)、「私の文學は、今迄いつたい何だつたのだらうと思ふ。模索して模索して、まるでもう乾いた花のやうに青春がすりきれさうな悲鳴も、私のいままでの生活には日夜あつたのだ。苦しく切ない日常を考へると、私は、本當は死んで歸つてもいいと思つたりする。」(十月二十四日条、p.174)、「何故、あの廣い戦場で自分は死なゝかつたのだらう、、、こゝまで来てしまふと、ほんのわづかだけれど、死んでゐても悔いはなかつたと云ふ、そんな甘さにも溺れられるのだ。」(十月二十七日条、p.222)と記し、死と隣り合わせの心境を吐露している。また、帰還を命じられた際には、「何と云ふこともなく、エア・ポケットに落ちたやうな實に空しい漠々とした氣持が、私におそつて来る。また、私は私に鹽をふりかけなければならない生活が戻つて来るのだ。何故、戦場で死なゝかつたのだらう、そんな氣持も湧く。」(十月二十八日条、pp.232-233)と、述べている。

このように、外面的な戦意高揚とは裏腹に、戦争による虚しさ・生命の儚さへの洞察がしばしば表れる。あるいは、戦火で荒廃した家や風に揺れる野薔薇の描写を通じて、戦争による崩壊の中に哀れと寂寥を感じ取っている。さらに、戦争を「陣痛」にたとえることで、痛み of 果てに新しい生命(再生)が生まれるかもしれないという、矛盾した希望と諦念を示している。要するに、これらの記述から、芙美子は戦時体験を通じて、生と死・希望と虚無の狭間で揺れる人間存在の不確かさを強く感じていたことがうかがえるのである。

#### 4. 背後の原因について

##### 4.1 愛国主義という背景

芙美子は「戦争協力作家」であつたとする見方がほぼ定説となつ

ている。1930年代に入ると、日本は本格的に帝国主義国家としての拡張政策を推し進めた。その中で、当時著名な作家たちを動員し、日本の戦争行為の広報・宣伝活動に協力させるために設けられた団体が「ペン部隊」である。芙美子もその一員であり、昭和12年(1937)年には毎日新聞の特派員として南京に入った。このような背景から、『戦線』には従来中国紀行に見られた中国への共感や気遣いは全く見られず、むしろ蔑視や冷酷な態度ばかりが表出している。その理由は、『戦線』が日本軍の戦争を美化し、宣伝する目的で執筆された企画的性格を持っていたからだだろう。即ち、「ペン部隊」の一員として戦況を国内に伝える意図が強く働いたのである。こうした背景を考慮すれば理解できなくもないが、「人気作家として他の作家に後れをとりたくないという芙美子の個人的欲望と、創作欲求が結びついて『戦線』が生まれたのではないか」という指摘<sup>25</sup>もある。実際、『戦線』は事実の記録というより、日本軍の侵略行為を美化することに力点を置き、中国人への視線は、従来下層民を丁寧に描いてきた作家の筆とは思えないほど冷淡で乾いたものになっていると言える。

なお、芙美子は北中国を旅した際からすでに愛国心を示していた。「一平民で、市井の女である私ですら、日本の現在を非常に案じて、何かしら、重苦しいものが始終頭の中を去来している。(中略)日本を離れてみると、何かしら、私は勇氣と誠実の溢れた「人」と「国」の強化を求める気持ちである。」「凍れる大地」、p.162)「新しい土地をみつけて、私達はどんどん開拓し、子孫の安福を計らなければならない。(中略)もう、これからの私達は、一人々々の気ままな生活は許されないのだ。盛あがり、盛あがって、私達は結束して、私達の国土を守って大きくしてゆかなければならない悩みがある。」(同p.197)と述べている。

小林美恵子氏によれば、昭和13年(1938)8月に編成された「ペ

---

<sup>25</sup> 姜銓鎬「第五章 芙美子の戦中期活動 I ――従軍ルポルタージュ作品」『林芙美子研究』、北海道大学博士論文、2020.6、pp.99―105

ン部隊」は「大名行列」と揶揄されるほどの厚遇を受け、火野葦平の『麦と兵隊』（『改造』、昭和 13）がベストセラーになったように、戦場からの情報は大きな需要があった。そのため、作家たちは今後の創作活動や経済的利益をも考慮し、情報部の要請に積極的に応じていたのである。<sup>26</sup>さらに、渡邊澄子氏によれば、明治 32 年（1899）の高等女学校令や明治 33 年（1900）の治安警察法などの制度化により、女性は政治活動から排除されたため、世界を視野に収めて戦争を構造的に捉えることは、当時の女性たちには無理だったろうと指摘している。<sup>27</sup>さらに、「良妻賢母」思想が浸透し、女性は「軍への献身」を美德として競い合うようになった。その結果、女性側も戦争への加担度を高める構図が生まれたとされる。<sup>28</sup>

即ち、芙美子は戦争協力作家として「ペン部隊」に参加し、『戦線』で日本軍を美化した。その背景には、国家による作家動員政策、名声維持への欲望、愛国的思想の高揚があった。また、「良妻賢母」思想により女性が軍への献身を美德とされた時代的制約も、彼女の愛国主義を形成する要因となった。このように、国家・時代・性の制約の中で行動した一作家の複雑な心理と社会的立場がうかがえるのである。

#### 4.2 日本兵隊との一体化の原因

前述した 4.1 の延長として、日本兵を高く讃える一面が著作の中に明らかに見られる。無論、従軍ルポルタージュであるため、日本兵と行動を共にしたことから、日本兵びいきになるのも理解できる。

「私は戦場で見る兵隊達の素朴な友情を忘れることは出来ません。一つのをいくつにも分けあい、一つの席もゆずりあう美しい男同志の友情はこれは見ていて虹のように美しいものでした。」（『戦線』、「三信」 pp.27-28）というように、作品は作者自身の生活記録の色合いを帯びている。兵士を描写する時には、「一人一人、なつかし

<sup>26</sup> 小林美恵子「ペン部隊」『女たちの戦争責任』東京堂出版 2004.9、p.152

<sup>27</sup> 渡邊澄子「日本の近代戦争と作家たちー女性文学者の戦争加担」『女性たちの戦争責任』東京堂出版、2004.9、p.122

<sup>28</sup> 同注 27、p.134



い故郷や、肉親や、友人を持っている兵隊。その箇々の生活に置かれていた一人一人の人間が、祖国の為に銃をにない、軍服に身をかためて、一大集団となり、どんな危険な場所へも、悠々と生命を晒してゆける「男」の偉さに、私は何か神秘的な尊いものを感じずにはいられません。」（『戦線』、「一信」p.15）「戦線へ出てみて、私は戦争の如何なるものかを知り、自分の祖国が如何なるものかを知りました。美食もなければ美衣もない、軀だけの兵隊が、銃をにない、生命を晒して祖国のために殪れてゆく姿は、美食や美衣に埋れて、柔いソファに腰をすえて、国家を論じている人達とは数等の違いだとおもわれます。」（『戦線』、「三信」pp.28-29）と語っている。

しかし、中国兵については、「狭い街のあっちこちに、支那兵が様々な恰好で打ち殪れています。まるでぼろのような感じの死骸でした。こんな死体をみて、不思議に感傷もないと言うことはどうした事なのでしょう。これは今度戦線に出て、私にとっては大きな宿題の一つです。違った血族と言うものは、こんなにも冷たい気持ちになれるものでしょうか。」（『戦線』、「四信」p.31）と書き、なぜあえてこの冷酷な一面を示したのか疑問を抱かせる。これは芙美子の本音であろうか。それとも軍部への配慮であろうか。また、「重傷して横わっている支那の正規兵を見ましたが、眼光はもう中心を失い、呆んやりと戸口の方を見ていました。誰かの顔に似ていると思いましたが、私は走ってそこを去りました。」（『戦線』、「五信」p.37）と不憫の情は一言も示していない。

しかし、日本兵に関しては異なる態度を見せる。「歩兵がじゃぶじゃぶ河を渡って行きます。手前の川床に近い方にいた兵隊が一人ぼくっと殪れました。私は思わず草の根をぐっと握りしめましたが、何かに向って必死に合掌する気持でおりました。」（『戦線』、「五信」p.35）と記し、さらに馬の倒れた様子についても、

「綿畑に捨てられた馬の淋しそうな表情を忘れることは出来ません。道のじきそばへ寄って来て、じっと、自分の兵隊を探している馬の不安な眼を想像してきてください。」（『戦線』、「五信」p.39）と哀

れみを述べている。つまり芙美子は憐憫心を欠いているわけではなく、敵味方に対して強い分別心を持っていたのである。さらに「兵隊が好きです」という言葉が頻繁に登場する。これは兵隊と長く同行し、共に困難な進撃を経験したからであろう。もちろん、自国を守る兵士であったため、親近感を抱いたことも理由の一つだろう。「日本の歴史家よ！この漢口攻略戦は、東洋だけの短い歴史にとどめないで置いて下さい。子々孫々光輝あるこの広大な地域を走った「兵隊」について語りつたえて下さい。」（『戦線』、「十四信」p.80）と北岸部隊を高く讃えている。これもまた、芙美子が「戦争協力者」と見なされる理由の一つとなった。

このように、芙美子は従軍記者として兵士と行動を共にし、彼らの友情や献身に感動して深い共感を抱いた。このような共感とは、彼女が日本兵との長期同行を通じて形成した現場的親近感と、「祖国を守る者」への愛国的連帯意識に基づくものと考えられる。作中で「兵隊が好きです」という言葉が繰り返し登場すること、兵士たちとの精神的な一体化を象徴している。そのため『戦線』では日本兵を理想化して描き、中国兵には冷淡な視線を向けている。敵味方の明確な区別と愛国的感情の高まりが、兵士讃美と戦争協力的姿勢を生み出したのである。

### 4.3 大東亜共栄圏の理念への追従

日本政府が宣伝していた大東亜共栄圏を深く信じることも、決して無関係ではなかったであろう。日清戦争というアジア蔑視に基づいた侵略行為に対して、作家を含む一般国民はそれを明確に認識してはいなかった。むしろ、朝鮮の独立を援け、列強に圧迫された中国に自覚を促す「正義の戦争」と考えていたようである。さらに、戦争によって自分の身内や周囲の人々が被る悲しみの現実直面すること<sup>29</sup>で、敵を倒そうとする思考と意志が生まれていったのである。芙美子にとって、大東亜共栄圏は単に「信じる」対象ではなく、

---

<sup>29</sup> 有名な与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」という詩も反戦の意図がまったくなく、もっぱら家継ぎとしての任務を負う弟を悲しむことだけである。

むしろ彼女自身が直接体験した西洋諸国による中国人蔑視の現実と深く関わっていたと考えられる。以下にいくつかの引用を示す。

北京を発って、天津につくと、イギリス人が経営している宿屋に泊まる。しかし、随所に「中華民國人の使用を禁ず」といった張り紙があった。「英國民は、こんな處でどうして中華民國を莫迦にしてゐるのか、私は厭な氣持でした。(中略)中華民國人は、何故抗日を叫んで、排外を叫ばないのかとおかしい氣持でした。(中略)同じ東洋人として、何か侮蔑されたやうな氣持ちでした。」(「北支那の憶ひ出」pp.79—80)。「西洋人が來て、平氣で支那人侮蔑をやつてゐることはてんとして何も云はないのだから、抗日主義も小兒病的なところが、大半あるやうな氣がして仕方がない。美しい公園ができて、支那人をボイコットしてしまつてゐる西洋人にはいつたい支那人はどんな感情を持つてゐるのだらう。アメリカのあるホテルでは黒色人種の宿泊を斷つたところがあると云ふけれど、支那にある外國ホテルにも、支那人の宿泊を斷るところもあつた。天津で英國人經營のホテルに泊ると、便所も風呂も「中華民國人使用を禁ず」と云ふ札ががぶらさげてある。そこのボーイ達は全部支那人なのだけれど、こんな札をみても、別に腹をたてないのが不思議だ。」(「支那南北」p.120)。「北京紀行」においては、「北京や天津の外人經營のホテルの手洗場は行くと、まづ眼につくものは、支那人の使用を禁ずと云ふ張り札である。外國人は口で宗教を説き、公園をつくつたり、病院、圖書館、大學を建てゝやつて、小さなこんな侮辱は平氣なのだらうか。」(「北京紀行」新潮社、昭和 14、p.289)

ほかにも、英國人の他は水浴を禁ず、城壁に上ることは許されない。…などの被蔑視の状況が起こる。このように、多くの遊記において、中國人が欧米列強から輕蔑される場面が描かれているのである。即ち、林芙美子は中國で外國資本が投下される文化的侵略の姿を目にしてきた。しかし、中國人は反抗はしなかった。したがって、彼女にとって、大東亞共榮圈こそが中國人を救う唯一の力であると信じるようになったのではなかろうか。

南京陥落のあと、「曾遊の南京」において芙美子は東洋の平和に関心を示し、それを自らの使命とする旨を記している。「支那はどうしてこんなに聲高く「抗日」をしなければならないのか不思議です。支那婦人が必死になつて、抗日大會なんかしてゐる寫真なんかみますと全く一犬虚を吠ゆればの言葉をおもひ出します。東洋の平和はまづ東洋の婦人から。事變がをさまつたならば、私達はじつくりと支那婦人達と話しあひたいと思ひます。」(p.62)

「もつと大局的なものに宣傳費をつかつてほしいものだ。皇軍の勞苦が捨石にならぬやうに、もつともつと官民一致を來したいものである。」(『私の昆虫記』、「宣傳省」p.98)

以上では、林芙美子が戦時中に示した大東亜共栄圏への共鳴を取り上げ、その背景を分析してきた。芙美子の大東亜共栄圏信奉は、単なる国家宣伝への追随ではなく、彼女自身の体験に基づくアジア人蔑視への反発から生じたものでもあるのである。即ち、彼女自身の経験的実感としての「アジア連帯」思想が根底にあると言ってよからう。

#### 4.4 夫の応召との関連性

芙美子の夫である画家・手塚緑敏は昭和12年(1937)の11月に応召の通知を受けた。夫婦とも落ち着かなかった気持ちであったことは、『私の昆虫記』に収められた「応召前後」から読み取れる。

応召の通知が夜の九時頃來たのですけれど、ベッドで新聞を讀んでゐた良人は、私が田舎から來た電報をみせに行くと「いよ / \ 來たかな」と云つてにや / \ 笑つてゐました。私も、「來たわね」と云つてにや / \ 笑つてゐました。私は何の用事だつたか、そのまゝ廊下へ出たのですが、自分で自分の用事を忘れてしまつて、また良人の部屋へ引つかへしてみると、良人はスタンドの燈火のそばへ電報を持って行つてちつと怖い目で眺めてゐます。今度はにや / \ 笑つてゐない。私は御不浄に行きたくなつて、御不浄へ燈火もつけないで這入つて行つたら、板戸に頭を打つゝけてしまひ、何と云ふこ

ともなくそこへ立つたなり呆んやりしてゐました。暗くて、誰もゐないのだから安心してつゝ立つてゐることが出来ました。（「応召前後」 p.47）

実際には大きな落胆があったのであろう。しかし、夫婦は表面上、あくまで穏やかに装っていた。その後、夫の実家に戻った際には次のように記している。「良人の父は大変な喜びやうで『これで俺も村に自慢が出来る』と大きい声で云ふので、私は父が酔っぱらつてゐるのかと吃驚しました。」（「応召前後」 p.49）。『私の昆虫記』は昭和 13（1938）年に出版された作品であり、戦時下の状況の中で、芙美子はあえて自分の率直な心情を語っている。最後は次の言葉で結ばれている。「何時戻つて来るものなのでせうか。何時、この事變が終るものなのか、一人で居りますと、時々それを考へます。」（「応召前後」 p.53）。したがって、芙美子を一面的に「戦争協力者」としてのみ捉えたと、彼女のもう一つの側面を見落とすことになるだろう。なお、翌月には芙美子自身が「東京日日新聞」の従軍特派員として中国に渡っている。したがって、その後の『戦線』『北岸兵隊』における兵士賛美や戦争賛美は、夫の出征と無関係であるとはいえないだろう。即ち、従軍途上で目にする兵士たちは、芙美子が夫の従軍する姿を重ね合わせてしまう可能性があり、それゆえ、日本兵に対して特別な思いやりと憐れみを抱くのである。同時に、日本が戦争を起こしたことは正当であると主張するようになったのである。

#### 4.5 貧乏と惨敗への恐怖

芙美子が戦争協力者として批判されるほど日本の侵略行為に好意的な態度を示したもう一つの理由は、むしろ「亡国奴」となることへの恐怖であったと考えられる。

上海の状況について、彼女は次のように述べている。「こんな事變のせゐか、どの質屋も満員の盛況で、壺や皿を置きに来てゐるひとだとか、自分の着物をはいでいくらかの金に代へてゐる人もあります。私は、この質屋の盛況を眺めると、全く石にしがみついても敗殘國にはなりたくないものだと思ひました。」（「私の従軍日記」、p.31）

さらに、次のようにも述べている。「捕虜達は弾薬運びや、水汲みなんかに使われていましたが、私は、いかに敗れた国のみじめさとは言え、支那の土民や兵隊が、営々とした格構で、日本の兵隊に使われているのを見ますと、もしも、これが、逆であった場合はどうしよう、私達は戦って戦って、最後の血の一滴まで悔いなく祖国の為に働きおおせる、そんな民族であることに、私は実に輝かしい自信とほこりを持つのです。」(『戦線』、「二十一信」 p.105)

この感覚はまた、芙美子の幼少期からの放浪経験とも無関係ではないだろう。『放浪記』では、屈辱から立ち直ろうとする心情を詳細に語っている。「世間だの義理だの人情だのが、どれだけ私達を助けてくれたと云ふのです？(中略)私は働いて、うんとお金持ちになりますよ、人間はおそろしく信じられないから、私は私一人でうんと身を粉にして働きますよ」<sup>30</sup>というように強い決心を示してばかりいる。したがって、文芸家協会からペン部隊への協力を求められた際には、彼女は即座に意欲を示している。「是非行きたい。自費でもゆきたい。(中略)女が書かなければならないものがたくさんあると思つてゐます。」(『東京朝日新聞』八月二五日朝刊)と、やる気満々のようである。

このように、芙美子の戦争協力姿勢は、単なる国家主義的熱狂というより、「生き延びるための戦略」あるいは「再び貧困に陥ることへの防衛反応」として理解すべきであろう。彼女の「敗戦恐怖」は、貧しさへの恐怖とほぼ同義であり、それが国家への忠誠心という形を取ったのは、時代の圧力と環境によるものだと言えるかもしれない。このように、作家としての表現欲求と、生活者としての現実的恐怖が複雑に絡み合っているのである。即ち、戦時協力を促した構造的要因を明らかにするなら、芙美子の経済的・心理的トラウマへの究明も必要だといえるだろう。

#### 4.6 カルチャー・ショックから齎された中国蔑視

---

<sup>30</sup> 林芙美子「放浪記 第二部」『林芙美子全集第一巻』文泉堂出版、1977.4、pp.362-363

芙美子が「戦争協力者」としてのイメージを持たれている理由の一つに、中国人蔑視という視点がある。しかし、これは単なる差別心というよりも、むしろカルチャーショックによって生じたものであると考えられる。まず、清潔さへのこだわりがある。「曾遊の南京」で昭和五年の南京の状況を次のように述べた。「埃が激しく、どのひともやたらに唾を吐くのですが、寺院なんかの建物に涕水を禁ずと書いてあったのめをかしい気持ちでした。この涕水を禁ずは、蘇州の寒山寺に行つても書いてありましたが、支那では南北を問わず相當の紳士が唾や涕水を方々へ飛ばして平氣なのです。」（「曾遊の南京」 p.60）また、「支那人の売笑婦は十一二歳からあるけれど、こんな残酷さが平氣なのは、どうした人種かとも考へる。」（「支那南北」 p.120）と不満の感情を滲ませた。

この清潔さへのこだわりは台湾訪問においてもみられる。台湾総督府に招待され台湾に渡ったが、台湾遊記においても、大稻埕という市場の様子について、凄まじくも歴史的に汚れた所で、盗人市でも見ているようにすべてが混沌としている。埃や垢と悪臭の貧民窟だ。ルンペンの巣である。崩れかけた小屋の中には、豚と人間が住んでいる...と、率直的に下層民の生活状況に嫌な気持ちを現した。

また、一般の観光客が立派な建物や古跡に感心するのは異なり、芙美子は次のように述べている。

紫禁城を始め、天壇とか、雍和宮、孔子廟なんか觀せて貰ひましたけれど、もう三日もこの見物が續きますと、私はうんざりしてしまつて、かうした豪華な建築物に何とない反感さへ湧いて來るのです。――今度の事變で、北京のこの紫禁城は事なきを得たとありましたけれど、私は心からあゝよかつたと云つた思ひはありませんでした。（中略）私はその頃の民衆を大變痛々しいものに考へます。（中略）實際腹が立つてしまうほど大きい建築物なのです。（中略）これだけの文化を造るために、この宮殿と同じ大きさに澤山の乞食を遺産として残してゐる古い支那を感じずにはられません。

前門街と云つて、支那人の商店街に行つてみますと、私は乞食の多いのに驚いてしまひました。(中略) 私は、あのやうな大きな廃居には、少しの愛情ありません。みぢんにくだけてしまへばいゝとさへ思つたりした位です。(中略) 私はむしろ、八達嶺なんかの山壁に歴史的なものを感じ、あのどこまでも續いた城壁に浸みるやうな愛情を感じました(「北支那の憶ひ出」 pp.72-73)

長い引用であるが、即ち、芙美子は紫禁城や天壇、雍和宮、孔子廟などを見学したが、その豪華さにうんざりし、むしろ反感を覚えるようになり、巨大な建築が築かれる一方で、多くの乞食を生んだ古い中国社会の矛盾を痛感する。言い換えれば、芙美子は「美」や「文化遺産」を無条件に称賛する立場を拒み、それを生み出した歴史的背景——人民の犠牲や搾取——に目を向けるのである。このように、権力の栄華と民衆の貧困の対比を通して、芙美子の倫理的・人道的観点が浮き彫りにされているのである。

さらに、乾隆帝が香妃のために浴徳殿を建て、その沐浴を眺めて満足したという逸話に対して、芙美子は次のように述べている。「私は莫迦々々しいと云はうか、ロマンチストと云つていゝのか、支那民族の血の流れを不思議に考へる氣持ちでした。およそ、立派なものにも限度と云ふものがあり、どんな素晴らしい古美術を見ても、生活のにじんであるものでなければ、私には何の興味もありません。」(「北支那の憶ひ出」p.74)天壇についても、次のようにも語っている。

「天を迎へる祭壇が八十萬坪の廣さの庭に大理石で造つてありましたが、私は見物しながら、あんまり人間を莫迦にしすぎてゐるこの大きな建造物に、本當に唾をひっかけてやりたい氣持ちでした。」(「北支那の憶ひ出」 p.74)と厳しく批判した。

このように、カルチャー・ショックから齎された中国蔑視感が赤裸々に語られているのである。

## 5. 終わりに



以上のように、本稿では芙美子の戦時作品、とりわけ論議の的となった『戦線』および『北岸部隊』の趣旨、さらに中国旅行記に表れた中国観を、テキスト分析を通して検討してきた。芙美子の宣伝活動が、果たして日本の戦争行為に積極的な同意のもとに行われたのかについては、なお議論の余地が残るといえよう。なぜなら、前述の「平和的な日常生活への憧れ」においての探究結果のほかに、戦後に発表した作品の中にも随所に見られる。

例えば、「女の日記」の序文において、「戦争と云ふ怖ろしい魔物にとりつかれて、私たちは惨酷なほどみじめな長い年月を過ごしてきました。」<sup>31</sup>と述べているように、彼女自身が戦争の惨禍を直視し、批判的に振り返っているからである。さらに、戦後の「晚菊」や「浮雲」といった作品にも、戦争批判の意識が仄めかしながら示されている。<sup>32</sup>したがって、芙美子には「戦争協力者」という強いイメージが付きまとうものの、その戦争観や中国観には、多面的で複雑な側面が存在していたと結論づけることが出来るだろう。

## テキスト

林芙美子 1939『北岸部隊』中央公論社

林芙美子 1939「北京紀行」新潮社

林芙美子 1938『私の昆虫記』改造社

林芙美子 1946『女の日記 序』八雲書店

林芙美子 1952「著者の言葉」『林芙美子全集第19巻』、新潮社

林芙美子 1977「放浪記」『林芙美子全集第1巻』、文泉堂

林芙美子 1977「晚菊」『林芙美子全集第7巻』、文泉堂

林芙美子 1977「浮雲」『林芙美子全集第8巻』、文泉堂

---

<sup>31</sup> 林芙美子『女の日記』序 八雲書店、昭和21、P.1

<sup>32</sup> 「晚菊」では、「この戦争ですべての人間の心の環境ががらりと變つたのだ」(『林芙美子全集第七巻』文泉堂出版、1977.4、p.48)というような記述が残ったりする。「浮雲」(『林芙美子全集第七巻』文泉堂出版、1977.4、p.48)は、身を滅ぼしていく女の情痴的恋愛を描いた作品であるが、敗戦後、焦土と化した東京の非情な現実には弄ばれ、厭世的になったり、ボロボロのように疲れ果てたりした男女の登場についての描写を通して、戦争がもたらした虚無感を指摘する。

林芙美子 2014『戦線』、中央公論社

林芙美子 2014「凍れる大地」中央公論社

林芙美子 2022『愉快なる地図：台湾．樺太．パリへ』中央公論新社

## 参考文献

岩渕 剛 2022「林芙美子の戦場」『民主文学 特集＝戦争と文学』、p.9

家森善子 2006「林芙美子—戦争迎合作家の反戦感情」『国文目白』第四十五巻、日本女子大学国語国文学会、p.128-134

遠藤光彦 2018『人と作品 15 林芙美子』清水書院、pp.79-81

蒲豊彦 2020「第九章 林芙美子の戦場」『戦場を発見した作家たち—石川達三から林芙美子へ』、新典社、p.282

川本三郎「林芙美子 略年譜」『林芙美子の昭和』、新書館、pp.399-407

菅 聡子 2010「林芙美子『戦線』『北岸部隊』を読む—戦場のジェンダー、敗戦のジェンダー」『表現研究』第92号、表現学会、pp.25-32

黄翠娥 2023「北村兼子と林芙美子、台湾とのかかわり」『日本語日本文学』第五十二輯、pp.70-96

小林美恵子 2004「ペン部隊」『女たちの戦争責任』、東京堂出版、p.152

姜銓鎬 2020「第五章 芙美子の戦中期活動I——従軍ルポルタージュ作品」『林芙美子研究』、北海道大学博士論文、pp.99—105

高崎隆治 1981「林芙美子の変貌」『戦時下文学の周辺』風媒社、pp.16—19

高山京子 2010「林芙美子と戦争」『林芙美子とその時代』論創社、pp.144—169

陳亜雪 2014「林芙美子の南京視察旅行」『内海文化研究紀要』42号、p.18

山田三郎 2003「十四 女ひとり中国の戦場をゆく」『林芙美子の昭和』新書館、p.249

宮田俊行 2018「林芙美子は「南京大虐殺」を見たか」『正論』第560号、産経新聞社、pp.132-133

李相福 2017「戦場における芙美子の無常観『北岸部隊』『戦線』を中心に」『浮雲』第9号、林芙美子の会、pp.2-4

渡邊澄子 2004「日本の近代戦争と作家たちー女性文学者の戦争加担」『女性たちの戦争責任』東京堂出版、p.122、134